

■ルール

リーチに対する一発・裏ドラなし

順位点はトップから順に+12・+4・▲4・▲12

決勝戦

準決勝までのポイントは、起家から内田慶ツアーチーム+72.6、戸構亮ツアーチーム+57.2、奥屋敷敬二ツアーチーム+47.1、忍田幸夫プロ+58.8。

2位以下を14ポイント以上離している内田ツアーチームはラスさえひかなければ優勝が狙える有利な位置。戸構ツアーチーム、忍田プロはともに内田ツアーチームを2順位下に沈めるのが目標。奥屋敷ツアーチームは自らがトップになり、内田ツアーチームをラスにしたいところ。

前日の予選で敗退し、勉強させて下さいと志願して決勝の採譜係になった私が採譜を担当することになったのは奥屋敷ツアーチームだった。誰が言ったか、「くろこが採譜をした人間はラスになる」というジンクスがある。だけど自称「負け犬レディース」の私が(注:私はまだ負け犬軍団にも入れてもらえていない。)採譜するのは同じ軍団の大先輩の奥屋敷ツアーチームしかいないだろ!ってわけで、ちょっと意気込んで採譜の準備。

奥屋敷ツアーチームに「採譜させていただきます」とご挨拶すると「よろしく頼むわ」と優しく応えて下さった。

東1局、内田ツアーチームが最も悔やむ局。



ここから安全牌(とおそらく思って残したであろう)の を切らずに打 。打 としていれば、次巡のツモ で 待ちの役なしドラ1のテンパイが入り、彼のツモあがりとなっていたはず。

まさに内田ツアーチームのアガリ逃しの巡目にアガったのが戸構ツアーチーム。



この半荘、終始戸構ツアーチームの打牌には、4月28日の内田ツアーチームの日記の言い回しを借りれば「旨いラム肉を提供しよう」という意識があふれんばかりに見られたように感じた。

指先の小さな震え。ツアーチームの中では比較的打牌速度が速い彼が、一打一打、丁寧に河に牌を置く様はなんだか美しかった。



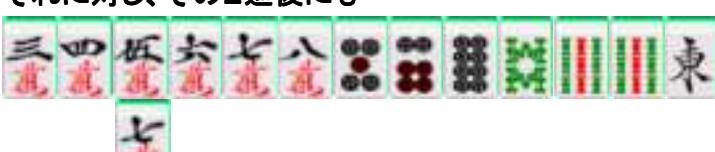
戸構ツアーチームのテンパイ打牌はドラである 。(テンパイですよ)とばかりに10巡目、ゆっくりと河におく。

同巡、忍田プロは



ここに戸構ツアーチームの入り目である を掴み、初牌の とともに打ち切れないと判断、手を崩している。

それに対し、その2巡後にも



この形で を引いて迷わず勝負している奥屋敷ツアーチーム。らしくない暴牌であり、そこに彼の「なんとしても優勝する」という気迫を感じた気がした。

奥屋敷ツアーの思いに手牌が応えたのがオヤ番である東3局。

配牌でトイツであったダブ東を2巡目にはアンコにし、4巡目にはイーシャンテン。



5巡目に南家忍田からリーチがかかるが、既に場に2枚切れたカン を引き、待ちでリーチ、すぐにツモアガリ。



ツモ

この3900オールで奥屋敷ツアーがトップ目に立つ。

その後、局は進み、オーラスを迎えて全員が優勝を狙えるポイント。

奥屋敷ツアーはアガれば優勝、戸構ツアーは1000点を奥屋敷ツアーから直撃か他からの2000点出アガリ、または400・700のツモアガリで優勝。3着目の忍田プロはラス親につきアガれば可能性は十分、ラス目の内田ツアーも1300・2600ツモで優勝。

忍田プロ、内田ツアーがテンパイを入れることができない中、まず8巡目に奥屋敷ツアーがテンパイ。



ドラ

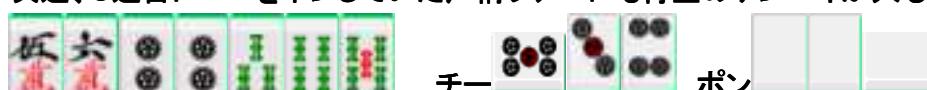
この時点で はすでに場に2枚切れ。

役ありになる はショーン牌だが、 は場に3枚切れ。奥屋敷ツアーは11巡目のドラまたぎの ツモでイーシャンテンに戻した。

続けてツモった で、再び と のシャンポン待ちでテンパイ。



次巡、6巡目に をポンしていた戸構ツアーにも待望のテンパイが入る。



チー ポン

採譜者は感情を少しも表してはいけない。普段から表情が豊かな上に未熟者の私はそのために終始わざと無表情を心がけていた。育成会時代に私に採譜を教えて下さった恩師の1人である忍田プロの前だから、なおさらだ。

だけど奥屋敷ツアーのツモってくる途中の牌が指先で隠されていない部分でマンズであると分かるたび、心はドキドキ。

。。上家の戸構ツアーの手牌も見える私。「 ではないように」と祈る。ピンフに変わる や をツモってきても、そちらの方が他家にも安全だから奥屋敷ツアーならツモ切るだろう。

ふと見ると、戸構ツアーの採譜をしている石原ツアーの顔も苦しそうにゆがんでいる。



17巡目。奥屋敷ツアーのツモってきたワンズは… ! 感動した私が牌譜記録用紙を置いて、うれし泣きをしてもよくなった瞬間だった。

「俺はな、強いんや。」打ち上げの席でつぶやく奥屋敷ツアー。闘う相手を食い殺そうとするような静かな凄みがある。きっと「私はまだまだだ」、「私は弱い」、そう言う方が簡単だ。「私は強い」そう言ったとき、負けたときの自分はただただみにくく、ひとりぼっちで、救いようのないものになるから。

「俺の配牌の取り方独特やろ。ゆっくり理牌するねん。配牌書きづらかったやろ。あれはな、自分のツモ筋に何があった

か見てるんや。ずっとそうしてて直らへんのや。」奥屋敷ツア一が私に色っぽい秘密をひとつ教えてくれた。周りの人は意味のないことに思えることでもいい。麻将競技者として、大切にするものがあるからこそ、明日へと生きていける。そんな心から好きで、尊敬する大先輩の初優勝を一番近くで目の当たりにできた私は幸せ者だ。奥屋敷さん、また巡りあわせがあったなら、どうか私に記録をさせて下さいね。